

参考資料 題材（情報リテラシーに関する宿題シート）

～「協働から個の思考を深める学習モデル実証研究レポート（ベネッセ教育総合研究所）」より

【エピソード】実践1

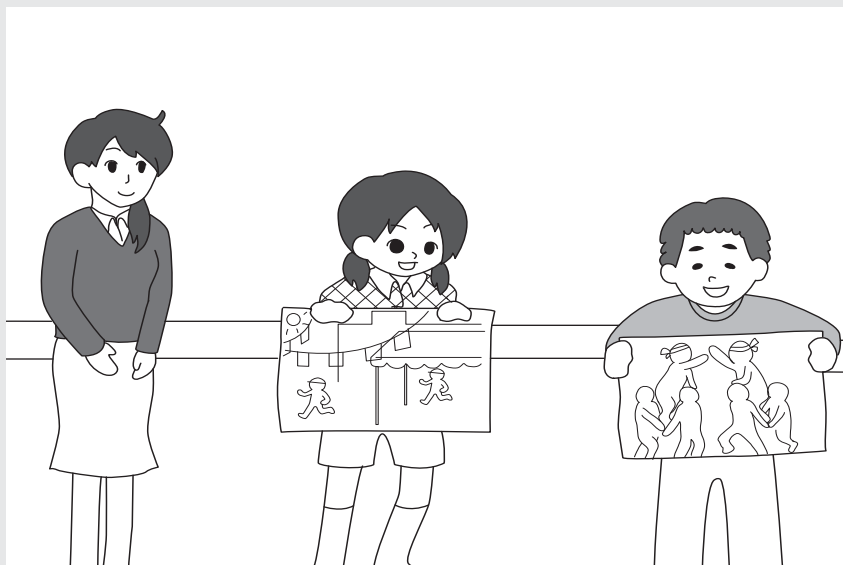
5時間目は、図画工作の時間。先生が声をかけました。「来月は運動会ですね。これから何回かの授業で、みなさんには、地域の人たちが運動会を見に来てもらえるような、素敵なポスターを作ってほしいです。今日は、どんなポスターを作るのか、最初の20分くらいで下書きを描いてみてください。先生がぱっと見て、どんな絵を描こうとしているのか、だいたいわかるようにしてくださいね」。

さっそく、クラスみんなはスケッチブックを開いて作業に取りかかりました。

20分後、先生から「それでは、何人かの人に、どのようなポスターを作るのか、教えてほしいと思います。みんなに向かって発表してください。誰から発表しますか？」と声がかかりました。

するとシホが手を挙げました。下書きには、太陽と校庭と学校の校舎、それにテントと旗が描かれています。「わたしは、秋晴れの空の下で元気に運動会を行いたいと思うので、晴れた校庭でテントを張って、旗が飾られている絵を描きたいと思います」と紹介しました。先生は「なるほど。明るく素敵なイメージになるといいですね」とコメントしました。

次に、リョウが手を挙げました。「ぼくは、運動会のクライマックスの、騎馬戦をアピールしたいと思いました。だから、ちょっと難しいけど、騎馬戦の絵を描きたいと思います」と紹介しました。下書きには、2組の男の子が騎馬戦で戦っている絵が描かれていました。先生は「動きのある絵を描くのはなかなか難しいけど、リョウ君は細かい表現も得意だから、大丈夫でしょう。ぜひチャレンジしてみてください」とコメントしました。



3番目に、アツシが手を挙げました。「ぼくは、これから小学校に入る幼稚園生も、卒業した中学生も来てほしいと思っています。だから、みんなが注目するように、ピョチュウがはちまきをしてバトンを持っている絵を描きたいと思います！」と紹介しました。下書きには、ピ

○チュウがバトンを持っている絵が描かれていました。

するとヒロミが手を挙げました。「アツシ、それはちょっとよくないんじゃない？」ユカが続いて手を挙げました。「みんな自分の絵でポスターを魅力的にしようと思っているのに、他の人が作ったピ○チュウに助けてもらうのはズルイよ」。アツシはエッて顔をしています。

サトウ先生は二人の意見を聞いて、アツシに言いました。「アツシ君、みんなに来てもらいたいという気持ちはとってもよくわかります。そのためにピ○チュウの力を借りたくなったんだよね。でも、ピ○チュウを描いている作者の人は、どう思うんだろう？ 学校の授業で作るんだから、自分の力で描いてほしいと思うんじゃないかな」。

「アツシ君だけでなく、みなさん、実は、アニメでもマンガでも絵でも、描いた作者の人が大切にしたいと思っていることがあるんです。たとえば、皆さんが作ったキャラクターが、自分が望まないような服を着せられたり、格好をさせられたりして、それを町の中に飾られたら、どう思うかな？ 運動会の格好をしているピ○チュウならいいかも、と思うかも知れないけど、作者の人にきちんと聞いて、やってもいいよ、って言ってもらわないと、そうしたことをしてはいけないんだよ」。

アツシはシュンとしながらも言いました。「自分一人のために描くならともかく、他の人に見せたりする目的で、他人が作ったものを勝手に作りかえたら、作者の人に失礼だということですね。もう少し考え直してみます」。ハルナがアツシに声をかけました。「だったら一緒に考えてあげようか」。

【今日の宿題】 この文章から問題点だと思うところに赤線を引き、短く理由を書きましょう。この宿題は明日の6時間目に使用するので必ず行ってください。

<ul style="list-style-type: none">••••••

【エピソード】実践2

総合的な学習の時間では、パソコンを使って北海道の北星小学校と交流学习を進めています。お互いの学校で、身の回りにある植物の様子をレポートしあって、植生の違いについて学んでいるところです。秋になってきて、北海道では葉の色づきが変わってきたのに、東京ではまだまだ、という違いを子どもたちが実感しています。最後のまとめが楽しみだな、とサトウ先生は思っていました。

ところが、今日は様子が違います。アツシがパソコンを見ながら「何だよ、それ！」と叫んでいます。「なにになに」、「どうしたどうした」とユカとリョウが駆け寄ります。

どうやらアツシは北星小の仲間から来たメールを見て怒っているようです。「ほんとムカつかない？ このメール！ あいつら何考えてるかわかんないよ」。アツシがメールを見せながら、ユカとリョウに熱く説明しています。「お前らとなんかもう一緒にやってらんない、って書いてやる」とアツシはパソコンに向かってメールを書き始めました。アツシはもう頭大爆発で押さえられない状況です。

そんなアツシに「ちょっと待って」とユカが言います。「このままケンカ売ってもさ、うちらも何もできなくなっちゃうし、困るじゃん」。リョウも「このメールはたしかにカチンとくるけど、こんなメール無視して、僕たちが調べたことをそのまま送っちゃえばいいじゃん」と説得します。「でもさあ、こんなこと言われて、黙っているのは我慢ならない！」アツシは熱くなって止まりません。



大騒ぎになっているのを見て、学級委員のヒロミが「なにになに、どうしたの」と駆けつけました。ユカが状況を説明します。「アツシがね、向こうから来たメール見てカッカしちゃってさ、ケンカ買おうとしちゃってるんだよね、どうしよう」。

ヒロミは、アツシが怒った原因のメールを読みました。「うーん、たしかに、ちょっと失礼

なメールだよね、アツシが怒るのも無理ないかもなあ。でもさ、何でこんなこと言ったのかちゃんと確かめてみたほうがいいんじゃないかな」。さすが学級委員。サトウ先生は騒ぎをずっと傍観していましたが、ちょっと頼もしいのでそのままヒロミに任せてみようかなと思いました。

ヒロミは言います。「私もね、お母さんがケータイ見てすごい怒っているのを見たことあるんだよねー。そしたら電話をかけてね。どうやらそのメールの相手にかけたみたいで、最初すごい怒ってたんだけど、なんか誤解だったらしくて、そのあとは機嫌直って急に笑って話してた。なんかメールみたいなものだとよく起こるみたいだよ。向こうとは授業の時間が違うし、電話番号も知らないから難しいけど、ちょっと落ち着いてから、きちんと真意を聞いてみた方がいいんじゃないかな」。アツシはうーんとうなりながらも、少し揺れ動いたような表情を見せます。

ユカがアツシに言いました。「それじゃ、うちらと一緒にちょっと探りを入れるメールを書いてみようよ。あんまりカッカしないでさ。先生ー、放課後に少しパソコン使ってもいいですか？」

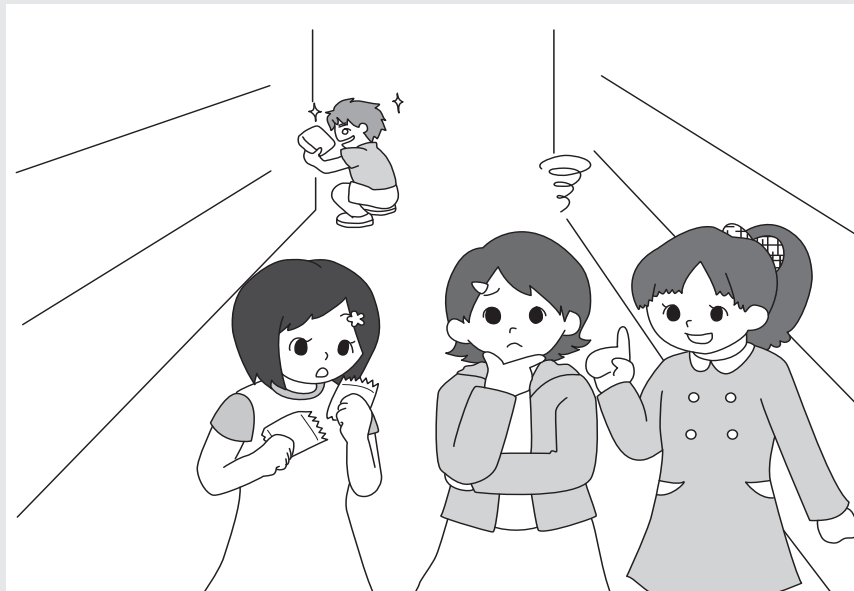
【今日の宿題】 この文章から問題点だと思うところに赤線を引き、短く理由を書きましょう。この宿題は明日の6時間目に使用するので必ず行ってください。

<ul style="list-style-type: none">••••••

【エピソード】実践3

スーパー・マスタメのお菓子コーナーは宿泊学習のおやつを求める児童で溢れています。ヒロミもアツシとユカ、ハルナと連れだってやってきました。おやつ代の上限は300円。限られた資源で最大限の満足を得ようとみんな真剣です。さて、どうやって組み合わせようかな、と横をみるとアツシが、ワルレンジャーセットに釘付けになっています。「ねえ、それお菓子じゃないじゃん、おもちゃだよ」とつつこみを入れるヒロミに、アツシは「ここに小さなラムネが入ってるから、お菓子だよ」と涼しい顔をしています。ワルレンジャーセット299円。どうやらこれ一つで決まりのようです。あきれた女の子たちは「お腹すいたって泣いても絶対に分けてあげないからね」と言い残して、棚を見て回ります。

ハルナがスナック菓子の前で立ち止まりました。「ねえ、これ、どっちがいいと思う？」指さす先にはラーメンスナックがあります。一つは大池屋で、もう一つは、よく知らないけど赤塚製菓と書いてあります。「やっぱ大池屋のがおいしいんじゃないの。有名だし」。ヒロミはそう答えましたが、ユカは値段にこだわります。「大池屋は100円だけど、こっちは90円だよ、安い方がお得だよ。味なんか変わらないよ」。うーん、確かに10円は大きい差です。差額でサイダー飴が一つ買えます。味が一緒なら90円の袋がお得だよなあ、とヒロミも納得しかけました。が、あぶない、あぶない。大事なことを忘れていました。ヒロミは、ハルナに頼んで袋に書いてある内容量（重さ）を読んでもらいました。大池屋のが80グラム、もう一つは60グラムでした。ということは？ ヒロミは暗算が苦手です。うーんとうなっていると、「大池屋がグラムあたり1.25円、赤塚製菓が1.5円」とユカが答えます。さすが、無駄にソロバン塾に通ってません。「そうか、じゃあ、本当に安いのは大池屋だね」。そう言ってハルナは大池屋のスナックをカゴに入れました。



そこへ。「ねえ、何してるの？」しっかり者のシホが手にスーパーのチラシを何枚も持って現れました。ハルナからこれまでの話を聞いたシホは、皆の前でチラシを広げました。「大池屋のラーメンスナックなら、カスガ・スーパーでもスーパー吉田でも目玉商品になっている

よ」。そう言いながら、シホは赤鉛筆でチラシに丸をつけました。カスガ・スーパーでは90円、スーパー吉田ではなんと50円の大安売りです。ハルナは、ラーメンスナックを棚に戻してすぐにでもスーパー吉田に駆けつける勢いですが、シホはそれを制止します。「ハルナ待って。スーパー吉田は遠いからバス代も計算にいれないとダメだよ。往復120円かかるから他のものも買わないと損しちゃう。行くなカスガの方だよ。私もVBラムネ買いにカスガに行くから一緒に行こうよ」。これを聞いたハルナは急におとなしくなりました。「私、マズダメでいいや。10円のために片道20分歩くなんでできない」。シホは不満そうにしていますが、ヒロミにはハルナの判断が正しいように思えます。ヒロミは、大池屋のラーメンスナックをハルナのカゴに戻してあげました。

しかし、まだハルナはうかない顔をしています。スーパー吉田に未練があるのでしょうか。「どうしたの」と心配するヒロミに、ハルナは、「えーとね。実は…、私ねえ、カロリーも気になるんだ」とちょっと顔を赤らめながら言います。「見てよ、大池屋は320kcalって書いてあるけど、赤塚製菓は300Kcalだよ。少ない方が太らないよね」。それを横で聞いていたユカが得意の暗算をします。「でも、グラムあたりのカロリーにすると、大池屋の方がカロリーは低いよ」。あら、そうなのかと安心するハルナに、シホが横やりをいれます。「でもハルナ、結局一袋食べちゃうんでしょ、だったら赤塚製菓の方がいいんじゃない？」ハルナはもうわけがわからないという顔をしています。ヒロミも頭がくらくらしてきたので、その場から離れて自分の買い物に専念することにしました。

買い物というのはいっとも単純なものではありません。まず、一番好きなレモン・グミ88円をカゴに入れる。そうすると残り…うーん、88円では計算が難しいので仮に90円と考えて残り210円。次に、みんなで食べたい大池屋の魚スナック100円をカゴに入れる。残り110円。暑くても溶けないプチプチ占いチョコをカゴに入れて残り80円。あとは小さな駄菓子たちを組み合わせると残り0円。レモン・グミに2円足しているのが本当は残り2円。10円のコーラ飴を12円の梅飴に取り替えて300円ぴったり。気持ちいい！明日晴れるといいですね。

【今日の宿題】 この文章から問題点だと思うところに赤線を引き、短く理由を書きましょう。この宿題は明日の6時間目に使用するの必ず行ってください。

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

【エピソード】実践4

ヒロミはふて腐れています。お小遣いを増やしてほしいとあんなに頼んだのに聞いてもらえないのです。「5年生にそんなお金いらないでしょ。いったい何を買うの!？」ってあんな剣幕で問い詰められたら誰だって言葉につまります。なのに、お母さんたら鬼の首を取ったみたいに、「ほら、きちんと言えないでしょ」って。小学生にだって必要経費というものがあるのです。頼みのお父さんは、「本ならいくらでも買ってやるからな。安心しろ」とピントが外れたことを言っていて役に立ちません。

泣きたい気持ちでテレビをぼんやり見ていると、画面の中で子どもがインタビューされています。「えっ? ちょっとお母さん!」ヒロミは声をあげました。「テレビで小学生のお小遣い事情っていうのやってるよ」。竹下通りで女の子がレポーターに一ヶ月のお小遣い額を聞かれています。「見て見て。月1万円って言ってるよ。6年生だってさ。あ、次の男の子は5年生なのに5万円ももらってるよ!」ヒロミはがぜん元気になってきました。「ほら、ほら、みんなこんなにもらってるんだよ」。そう言って顔をのぞき込むと、お母さんは、「何言ってるの。よその家のことは関係ないのよ!」と反撃してきました。いつもこれなんだから、大人はずるい。ヒロミは頬を膨らませます。子どものお小遣いにだって世間の相場ってものがあるでしょうよ。



その時、お父さんがボソッと「そういう問題じゃないんだよ」と言いました。あれ?私に味方してくれてるのかな?ヒロミは期待してそっちを見ます。「こういうインタビューには注意が必要なんだ」。あれれ、なんか流れが変だぞ?「まず一つは、サンプリングの問題。といっても子どもには難しいかな。例えばだなあ、そうだ。ヒロミ、もし、ヒロミがテレビレポーターから急に呼び止められてお小遣いの額を聞かれたら、答えるかい?」急な問いかけにびっくりしながら、でもヒロミはきっぱりと答えます。「恥ずかしいから絶対にいや!」全国民に対して自分のお小遣いの額を公表するなんて恥ずかしくてできるわけがありません。「そうだよね」。お父さんはすまし顔で話を続けます。「だとしたら、この二人の他にインタビューを断

った人が何人もいたのかもよ」。うーん、そうかもね。あまり少ないと恥ずかしいもんね。「あ、じゃあ、ここで答えた人はお小遣いの額を言っても恥ずかしくない人だけってことなの？」ヒロミの答えにお父さんは満足そうです。「その可能性は高いね。もっと言うと、竹下通りに来ているのはたくさんお小遣いをもらっている子だけなのかもしれないね」。ヒロミは、お小遣い値上げが遠のいていくのを感じながら、でも、この話はちょっとおもしろいと思いました。今まで、こんな風にテレビのインタビューを見たことはありませんでした。ヒロミの頭にはさらに疑問が生まれました。「ねえ、お父さん。じゃあ、テレビの人はお小遣いをたくさんもらっている子を撮りたくて原宿に行ったってことなのかなあ？ 戸越公園商店街じゃなくて……」。ヒロミの問いかけにお父さんは、「断言はできないけどね」と言いながら画面を指さしました。

画面の中では、人気の貧乏キャラ芸人が「うわー、最近の子は金持ってんなあ。俺の年収と同額っすよ」と騒ぎ、みんな楽しそうに笑っています。「ヒロミがこの番組を作る人だったら、どういう子どもにインタビューすると思う？」……うーん、そりゃあ、番組的には超セレブな子どもが出てくれば盛り上がるよね。私、面倒くさがりだから高い金額を言ってくれるように子どもにたの頼んじゃうかもなあ。そんなズルをしないにしても、高い金額を言った子どもだけを選んで流すくらいのはするかもなあ……こう考えながらヒロミは、インタビューの後ろに隠れている「番組を作る人」の顔が見えたような気がしました。

【今日の宿題】 この文章から問題点だと思うところに赤線を引き、短く理由を書きましょう。この宿題は明日の6時間目に使用するので必ず行ってください。

<ul style="list-style-type: none">・・・・・・
